論　文

カナダにおける毛皮交易の進展と先住民奴隷

――「多くの優しからざる絆」の事例

下　山　　晃

要　約

200年の歴史を通じて、カナダの歴史展開の基層に広く先住民奴隷化の進展していた事実が徐々に明らかになり、カナダ史理解の常識や通説は大きく揺らぎはじめている。従来さかんにもてはやされてきて通説ともなっている「カナダにおける多くの優しい絆説」は、先住民受難の歴史を軸に据えた分析視点に立てば、全くの幻想であったことがすぐに理解できる。先住民奴隷化問題は、実は現今の有色人種差別問題や格差の問題とも密接につながる極めて重要な問題として、カナダにおけるその歴史的意義の大きさが問い直されはじめているのである。本稿筆者は、毛皮交易の世界史的意味を考察し続ける中で、このカナダの先住民奴隷化問題を「多くの優しからざる絆」の視点から分析し、今までいくつかの論文と著書を発表してきたが、本稿では、これまで日本では全く紹介されてこなかったヌーヴェル・フランスとカナダ北西部における先住民奴隷化の具体的事例を多数紹介し、それをカナダ毛皮フロンティア開拓史の流れの中で解析して、奴隷化という「優しからざる絆」がむしろカナダ史展開の本筋であったことを立証する。

キーワード：ヌーヴェル・フランス、カナダ北西部、先住民、毛皮、奴隷、ハドソン湾会社、北西会社

はじめに：カナダ史の幻想の崩壊

1．マギル大学創設者と奴隷制問題

2．ヌーヴェル・フランスの先住民奴隷・パニ

3．カナダ北西部毛皮フロンティアと先住民奴隷

（1）毛皮会社の実像

（2）カナダ北西部先住民社会の奴隷制

（3）毛皮会社との接触と先住民奴隷

4．おわりに

はじめに：カナダ史の幻想の崩壊

内外の学会ともに、カナダ史と奴隷制度史の関連は、大方は単にただ「地下鉄道」の終着点（逃亡奴隷・解放奴隷の逃避先）としてだけ言及されてきた。国内に無数の保留地を抱え、国連の「先住民の人権宣言」に2015年まで「反対」の立場を保持し続けてきたカナダでは、先住民に対する虐殺・迫害の歴史、特に先住民奴隷化の問題を問うことは強固なタブーだった。まとまって残された史料も少ないため、最近になって包括的な整理が進展している国際的な奴隷貿易の膨大な統計データ類にも、カナダ先住民の奴隷化についてのデータは含まれてはいない。

しかし、植民開始期から19世紀に至るまで、カナダはフランス植民地帝国やイギリス帝国の展開が「当たり前」としていた社会経済的・法制史的な基層構造を基本として開拓が進展したのであり、またカナダに毛皮や土地を求めたヨーロッパからの移民たちの「世間の常識」によって社会形成のトレンドは規定されていた。そのヌーヴェル・フランスの時代から19世紀の終わりに至るまでの期間は、砂糖やタバコ、コメ、石炭、インディゴ、毛皮、麻、そして綿花などの世界商品のプランテーション・開拓地の「開発」と結びついて北米全域（環大西洋地域一円）で奴隷制がそれまでの時代にはない規模と徹底ぶりで継起的に拡張し、先住民社会も次々と崩壊へと追い込まれた時代だった。そのシステム的な展開の中でカナダだけが「多くの優しい絆」を国家的な伝統としたと見るのは、多文化共生を看板とする現在のカナダの「世間に浸透している雰囲気ないしは常識」からの類推でしかなく、世代間に継承されてきた一種の共同幻想である。

その「共同幻想」が、実はいま現在進展中の黒人差別問題やコロナ騒動にまつわる人種差別問題ともダイレクトにつながりながら、音を立てて崩れはじめている。

そこでこの論考では、まず現今の人種問題がいかに歴史的にカナダ社会の形成に基軸的な意味をはらんでいたかを再確認するために、カナダ奴隷史と密接な関わりを持っていたジェームズ・マギル（名門マギル大学創設者）の人物像をめぐる論議を紹介する。そしてその論議が、実はカナダ史展開の本筋といえる人種差別問題として歴史的にいかに形成されたかを、カナダ先住民奴隷化の事例から確認し、カナダ開拓史は奴隷制や人種差別の広がりと強く結びついていたことを示しておく。次にヌーヴェル・フランスで「パニ Panis」と呼称された先住民奴隷の具体的事例に触れ、仏領カナダの形成と展開が先住民奴隷化を恒常的に伴った史実に目を向ける。そして最後に、「奴隷労働が基軸」といった記録も多数残されていることが知られはじめたカナダ北西部フロンティアの先住民奴隷について詳しく紹介し、

内外のカナダ史研究の空隙を埋めると共に、それを当時のグローバル経済史の展開の中に位置づける考察を行なっておく。こうした考察によって、カナダもまた近代奴隷制システムの広がりを基幹とした「プランテーション複合」の中に歴史を刻んできたことが明確に理解される。

１．マギル大学創設者と奴隷制問題

まず、カナダ最古で屈指の名門といわれるマギル大学の創設者ジェームズ・マギル（1744年 -1813年）の奴隷商人・奴隷保有者としての人物像をめぐる問題を典型的な事例として見てみると、「世代間共同幻想の崩壊」に至るカナダにおける歴史再検討の動きの深刻さが理解できることになる。

2012年にアメリカのフロリダ州で自警団員によって殺害された黒人少年の事件で「#BlackLivesMatter」というハッシュタグがSNS上に公開され、「Black Lives Matter」という言い回しが広く関心を集めはじめる。その後毎年のように先住民・黒人・アジア人に対する理不尽な射殺や迫害の様子がニュースやネットで報じられ、「BLM運動」は、世界規模における社会の分断への危機意識とも絡まって、国際的にも大きな注目を浴びてくる。そんな折、2021年に創立200周年を迎えたマギル大学のC・A・ネルソンは「Slavery and McGill University: Bicentenary Recommendations」を公表し、その冒頭で次のように問題意識を提示した[1)]。

「2020年５月25日、ミネアポリスで、偽ドル札を渡したという非暴力犯罪で告発されていたジョージ・フロイド氏を４人の警察官が殺害。６月５日には、#Black Lives Matter の抗議者たちが白人イギリス人奴隷商人の公共記念碑を破壊し、実物大の彫像をブリストル港に投げ込んだ。2020年に進行中のCovid-19のパンデミックは、何世紀にもわたる人種的不公正のために、医療へのアクセスや黒人の破滅的な死亡率には著しい差別が伴っていることを証明している。

いま、黒人のアイデンティティ、生活、体験が世界中の人々の意識に入り込んでいる。上記のような事件や事実が世界的な抗議行動に拍車をかけている。それだからこそ、各国首脳や企業の最高経営責任者までもが、体系的な人種差別を認め、黒人社会へのコミットメントを宣言しようと躍起になっているのである。

１）Charmaine A. Nelson, Slavery and McGill University. 以下、サイトを引用したものは、アクセスしにくいと思われる場合以外はサイトのキーワードのみを表記し、URLは省略する。文献名も長いものは省略して引用する。

2020年の冬に行なった学部講義「The Black Subject in Historical and Contemporary Popular Visual Culture」を、私はまず、警察によって殺されたアメリカ人とカナダ人の黒人の名前を読み上げることから始めた。そのリストは不完全なものだったがすこぶる長いもので、私は学生たちに、悲しいかな警察の残虐行為によって殺された黒人の名前を挙げれば、それだけで講義全体が埋まってしまうかもしれない、と告げざるを得なかった。講義の内容は、西洋美術や視覚文化における、しばしば暴力的で否定的な黒人のステレオタイプ化が、大西洋一円に展開した奴隷制度における奴隷の非人間化をいかに正当化するのに役立ったかを探るものであった。

私が以下の概要で考察するカナダの奴隷制の歴史は、当のカナダではほとんど意図的に抹消されてきた歴史である。200年の歴史があるにもかかわらず、カナダの学界と一般市民は、日常的にこうした歴史を否定し、無視している。西洋の大学の歴史と大西洋にまたがる奴隷制との間には、しばしば明白で直接的かつ深いつながりがあるにもかかわらず、そうした学術的な拒否が行われているのである。わがマギル大学の場合もまたそうである。奴隷所有者であり西インド諸島の商人であったジェームズ・マギルの１万ポンドの遺贈が大学設立の直接のきっかけとなったにもかかわらず[2)]、マギル大学はこれらの歴史を無視し、大学創立基盤となった反黒人・反原住民の人種主義を認めようとはせず、批判的な検討・是正を怠ってきたのである。」

ネルソンはこの提言を公表した冬学期にセミナーを催して、奴隷制問題と大学・カナダ社会の関わりを本格的に見直すことを呼びかけた。しかし、ブラウン大学やハーバード大学、プリンストン大学、イギリスのグラスゴー大学、そしてカナダのダルハウジー大学やキングスカレッジでは、こうした問題を再検討する動きがはじまっていたにもかかわらず[2)]、マギル大学の理事たちには、200周年という重要な節目の機会にあっても、そうした問題を調査するタスクフォースやワーキンググループを立ち上げるつもりは全くないことが明らかになった。

ネルソンの問題提起に並行して、「JAMES MCGILL AND SLAVERY IN QUEBEC」「200 years a slave: the dark history of captivity in Canada」「Slave trade helped build Manitoba's early economy」といったサイトもかなり多く見られるようになり、カナダの発展もまた奴隷制とは決して無縁ではなかったこと、むしろ大きな関わりがあったことが徐々

２）ネット上にはすでに2017年から、Slavery and Justice: Report of the Brown University, Harvard and Slavery: Seeking a Forgotten History, The Princeton and Slavery Project, Slavery, Abolition and the University of Glasgow, Glasgow University to pay £20m in slave trade reparations, Lord Dalhousie Scholarly Panel on Slavery and Race, King's and Slavery: A Scholarly Inquiry, University of King's College and Slavery: A Scholarly Inquiry, December 2017といったタイトルのサイトが公開されている。

に確認されるようになった。「Canada First Nations Slavery」といったキーワードの組み合わせで検索をかければ、今ではかなり多数の関連サイトの情報が目につくようになっている。

もっとも、この問題に関する本格的な学術的な問いかけは、2011年に逝去したマルセル・トゥルーデルによって早くから行なわれていたものである。彼の代表的著作『カナダの忘れられた奴隷：200年の束縛』は英語版のペーパーバックがようやく出版されたばかりである。トゥルーデルは、奴隷を手に入れることに熱心で、隣人の前でそれを誇示することに誇りを感じていた何百人もの著名人や普通のケベック人の名前を列挙して、「奴隷制度に関するカナダの神話をずたずたにしている」。人々は奴隷を買うために借金までしたという。

「ケベックにおける奴隷制度は、経済的な必要性ではなく、むしろ名声を与える公的な贅沢の一形態だった」とトゥルーデルは書いている。18世紀のケベックでは、奴隷保有はステイタスシンボルであり、田舎よりも町で見かけることが多く、畑仕事よりも家事雑役の方が多かった。

トゥルーデルは『*L'esclavage au Canada français*』を1960年に出版していたが、この本はケベック州で大きな騒動を引き起こした。というのは歴史家や教会の指導者たちは何世代にもわたって、奴隷制度があったとしても大した規模ではなく、「イギリス人が持ち込んだ奴隷制もアメリカに比して僅かなもの」という神話を、誰もが長いあいだ信じてきたからである。そして、「カナダは逃亡奴隷がめざした地下鉄道の終着点で自由の地」ということだけが強調され続けた[3)]。

トゥルーデルの入念周到な研究に誰も反論することはできなかったが、カトリック教会はトゥルーデルの名前をブラックリストに載せて社会からの排除を画策、彼は1965年にラヴァル大学を「追放」される形で辞職し、やむなくオタワ大学に移籍せざるを得なかった。カナダ最大のタブーを破ったためである。ちなみに、カトリック教会は、アメリカにおいても奴隷制廃止に最後まで反対する堡塁の役割を果たしていた。

以上を念頭に、こうした現今の議論を引きずるようになった「カナダ史の本筋」、先住民奴隷化・差別の歴史を以下で詳しく解析していきたい[4)]。

3）200 years a slave: the dark history of captivity in Canada

4）トゥルーデルにさらに先行するカナダ奴隷史研究については以下を参照。
Hamilton, J.C. «The Panis : An Historical Outline of Canadian Slavery in the Eighteenth Century» (*Proceedings of the Canadian Institute*, Vol.1, Part 1, Feb. 1897). Hamilton, Slavery in Canada (*Transactions of the Canadian Institute for the year 1890*, Toronto, 1891). Smith, T. Watson. *The Slavery in Canada* (Collections of Nova Scotia Historical Society, 1899) http://www.acrosscan.com/slavery-canada/slavery-in-canada.htm WINKS, Robin. *Blacks in Canada*. Montreal: McGill-Queens Press, 1966. Riddell, William Renwick. "Further Notes on Slavery in Canada" (*The Journal of Negro History*, vol.9 (1): 1924), 26-33.

２．ヌーヴェル・フランスの先住民奴隷・パニ

ブラジルやニューファウンドランド沖への航海の経験をもっていたジャック・カルティエが「北西航路探査」の命を受けてヨーロッパ人としてはじめてセントローレンス川上流域にまで船を進めたのは1534年のことである。翌35年から36年には百名規模の３隻の船団で第二次航海、41年から42には総勢1500名という遠征隊を率いて第三次航海に出向き、現ケベックやモントリオール周辺のイロコワ（イロコイ）族居留地に至ってその地を中国に向かう航路の「発見」であると報告、当地での奴隷取引独占権の認可と引き換えにフランス領として国王に献上することを申し出た。これがヌーヴェル・フランス、現カナダの起源である。カルティエは36年の記録だけを見てみても、ハウデノサウニー族の酋長ドナコナとその息子たち、その他７人の先住民を拉致してフランスに連れ帰っている。カルティエが何より求めていたのは、金と奴隷と、高値で売れる毛皮だった。そして、鱈漁場として知られることになるニューファウンドランドは実は、すでに1500年頃からリスボン向けの奴隷輸出がさかんに行なわれていた地域だった[5)]。

その後ヌーヴェル・フランスの領域は英領13州を取り囲む形となった。フランス重商主義政策はフランス国内の産業育成を優先していたものの、ヌーベル・フランスでも各種産業の育成がはかられた。大方は軌道に乗らなかったが、毛皮フロンティア開拓の進展は、のちの時代に「セントローレンス商業帝国」の発展を促した。本国のルーアン、トゥレーヌ、ローシュ、ボーリュウなどでは輸入の急増したヌーヴェル・フランスからの毛皮を原料として皮鞣業や製帽工業、染色業が発展、毛皮や奴隷の取引に利用するためのブランデー業、ワイン業も活況を呈し、一時ボルドー、ロワイヤンを出帆する商船の積荷は酒造業界の物品が大半を占めることもあった[6)]。

ヌーヴェル・フランスのすぐ西方に住んだのがポーニー族の集団で、一時はフランス奴隷商人の最大のターゲットとされた先住民である。ポーニー族の一派にパニマハ族（les Panimaha）があり、そのパニマハからの奴隷が特に多かったためにのちの時代にはフランス領における先住民奴隷の総称として「パニ Panis」という呼称が一般化することになる（異説はある）。

1670年から1715年の間に英領カロライナのチャールズタウンから奴隷として輸出された先

５）*L'Encyclopédie canadienne*: “Esclavage des Autochtones au Canada” の項目

６）C.W.Cole, *French Mercantilism 1683-1700*（Octagon Books,1965）pp. 66-77. R. Delort, *L'Histoire de la Fourrure de l'Antiquité à Nos Jours*（EDITA S.A., 1986）pp.153-158, 183.

住民の数は、輸入されたアフリカ人奴隷の数を上回っていた。関連資料が比較的多く散見されるようになる1783年以降のおよそ150年の間のヌーヴェル・フランスも同様だった。

「先住民奴隷はカナダにおける奴隷の３分の２を占めて黒人奴隷数を圧倒していた」という事実があるにもかかわらず[7)]、このパニについてのまとまった著作は未だに１冊も著されていない。J・C・ハミルトンには“The Panis”と題した論考があり、またA・W・ローバーの『合衆国先住民奴隷史』にはパニを紹介した記述が何箇所かある（pp.32, 89, 246-247）が、そもそもアメリカ合衆国カナダの先住民奴隷化についての本格的論考や著作はローバーの著書（初版は1913年）以外、ほとんど見られない。カナダ史形成における先住民奴隷化問題の重要性は、例えば2012年になって、B・ラシュフォースの著作などが出版されて、ようやく俯瞰して認識されはじめたのである[8)]。

ユトレヒト条約でイギリスとの対立が小休止することになり、その前後から1740年代までヌーヴェル・フランスはフランス系カナダ人が今でも哀愁をこめて「黄金時代」と回顧する繁栄期を迎えるが、その「黄金時代」開始期の1709年４月に、総督ジャック・ラウドーが植民地条例「Ordonnance rendue au sujet des nègres et des sauvages nommés panis」を制定し、奴隷制度の合法性を明確にしていた。植民地に連れてこられた奴隷は黒人も先住民も購入者の所有物とみなされると規定した条例である。先住民との余計な摩擦を危惧したフランス本国政府はこうした条例に対して何度か規制を試みる（1693年、1736年などに先住民売買禁止令を通達）が、遠く離れた植民地では通達は無視されることが多かった。この条例は、官吏の奴隷貿易独占権益保持を企図すると共に、すでにかなり広まっていた先住民奴隷化を法的に追認したものであるが、フランス人入植者による奴隷制の本格的な導入は1632年に始まっていた。モントリオールでも、1670年にはすでにパニについての記録がある。

17世紀半ば、フランス商人から銃器を得ていた東部の部族との抗争で多数のポーニー族の戦争捕虜が奴隷として売られるようになり、パニという呼称はまずミシシッピ川上流域とその東側で一般化した。それがかなりの期間続いたため、フランス人はどの部族から連れ去られたかに関わりなく、先住民奴隷を一括してパニと呼ぶようになったのである。17世紀半ば以降には、ニューメキシコのスペイン人やプエブロ族にまで大量のパニが売りつけられ、

７）Musée canadien de l'histoire, Musée Virtuel de la Nouvelle-France, “Les explorateurs Jacques Cartier, 1534-1542.” および Enslavement of Indigenous peoples in Canada のサイト。

８）J.C.Hamilton, The Panis, An Historical Outline of Canadian Slavery in the Eighteenth Century（In *Proceedings of the Canadian Institute*. Vol. i. Part i. February, 1897.）A.W.Lauber, *Indian Slavery in Colonial Times within the Present Limits of the United States*, AMS Press. 1973. Brett Rushforth, *Bonds of Alliance: Indigenous and Atlantic Slaveries in New France*.（Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2012.）

「パナナ」という呼称が広まっていた。1685年にはルイ14世が60条からなる黒人奴隷法 Code Noir を制定し、カリブ海域のフランス植民地の黒人奴隷とヌーヴェル・フランスのパニにもその条項は適用され、「奴隷の母を持つ子は奴隷」「裁判を受ける権利は無し」「結婚の自由は認めない」「反乱者は鼻を削ぐ」など、いくつもの差別的項目が細かく定められた。売れ行きが悪ければ奴隷は殺される事も多かった。大量のパニの子供が売れ残ったために、みな首を刎ねられたという話もある。パニには少年の奴隷が多く、カナダ歴史博物館の資料は「パニの平均年齢は14歳」だったと記録している。パニは毛皮猟や農作業、鉱山労働などに酷使されると共に、家事使用人、愛妾、フランス人や友好部族への贈答品、石工、ガイド、通訳、荷役、調理婦、守備兵などとして使役された。ヨーロッパに売られて、ガレー船の漕ぎ手としてこき使われたパニも居た。

パニが先住民集落に同化される場合には、「以前は敵対者であった」というアイデンティティを完全に消し去るために「儀式的拷問」が行なわれることがあり、殴打や打擲はもちろんのこと、親指や四肢の切断、耳・鼻の斬り落としなどが見られた（これは17世紀のカリブ諸島でよく見られた拷問でもある）。爪を引き抜かれてから、うやうやしい儀式を経て部族内の欠落員の「生まれ変わり」とみなされるパニも居た[9)]。

カナダ歴史博物館のサイトの解説では1700年から1760年まで、ヌーヴェル・フランスでは少なくとも2,000人が奴隷として拘束され、その３分の２は先住民だったとしている。また17世紀半ばから1833年の奴隷制廃止まで、記録に残されたパニの総数は2,683人だったとみなしている。しかし密貿易が当たり前で、しかも相次ぐ争乱が各地で絶えなかったことに鑑みると、また、カロライナや西インドにまで「輸出」されたパニもあったという記録も多く残ることに鑑みると、ヌーヴェル・フランス全域にはもっと多数のパニが居たことは間違いがない。のちに『世界周航記』を残したルイ・アントワーヌ・ド・ブーゲンヴィルは、「パニはヨーロッパにおける黒人と同じ役割をアメリカにおいて果たしている」とまで書き残しているから、記録に残されていない実数はおそらく、少なくとも数万人だったということになるだろう。事実、1763年には、７万人の白人、400人の黒人に対し、３万人以上のパニがカナダ東部に居たと述べる記録も残されているのである。

フランス本国政府は、当初は先住民奴隷化問題に対しては「取り立てて規制の必要はない」といった程度の認識であったが、西インド会社（1664年にコルベールが設立）による奴

9）Les Grands Mystère de L'histoire Canadienne; La torture et la vérité ; Angélique et l'incendie de Montréal および Native American Slaves: Historians Uncover an Overlooked, Chilling Chapter in U.S. History のサイト。Gilles, David（2008-2009）. "La norme esclavagiste, entre pratique coutumière et norme étatique: les esclaves panis et leur statut juridique au Canada（XVIIe-XVIIIe s）". *Ottawa Law Review*.

隷貿易の利益が相当にのぼった場合もあり、18世紀になると、1728年にはパニ１人につき５リーヴルの税を課すことを定め、その租税収入は教会や病院の建設費にあてられた。1736年に植民地総督ホッカートが奴隷狩りに本腰を入れ、45年には本国枢密院が先住民奴隷化を認可した。天然痘菌撒布による細菌戦争の先例とされる1639年のヒューロン族との闘い、1641年から10年間におよぶヒューロン・フランス連合対イロコワ・イギリス連合の闘い、1712年のフォックス族との闘い、1715年から40年まで断続的に続いたナチェス族との闘い、1720年のチカソー族との闘いなどではいずれも相当数の先住民が戦争捕虜となり、奴隷化されてハイチなどの砂糖プランテーションに送りつけられていた。ヌーヴェル・フランスの森深くに入り込んだ毛皮の罠猟師（coureures de bois）やライセンスを持たないもぐりの探検家（voyageurs）が奴隷商人となって、イギリス領に先住民を売りつけることも多かった。

なお、ミシシッピ流域東部地方は、特に鹿皮取引と奴隷取引の莫大な利益の独占を目指してカロライナの総督や軍人が私設軍団を組織して奴隷狩りを目的に先住民との戦争を繰り返したため、18世紀初頭から半ばにかけて絶え間なく多数の先住民奴隷が生み出された。1702年にはフランスの役人がチョクトーの代表から「奴隷狩りのために500ものチョクトーの村がなくなり、1800人が殺された」という証言を聞いているし、1704年から翌05年にかけてはアパラチー族、1706年にはティムクァ族が1000人以上奴隷にされたとの記録が残っている。また、同じ年、チョクトーの村から300人の女子供が連れ去られ、08年には「何人捕えられたかわからず、何人殺されたか数えきれない」との知らせが伝えられた。1711年にも330人が奴隷とされ、翌年だけでも少なくとも2500人の奴隷がイギリス領に売られたという[10)]。さらに29年にはすでに何百人もの黒人奴隷が使役されていたルイジアナで大規模なナチェズ戦争が勃発、壊滅的な敗北を喫したナチェズ族の生き残りはサンドマングの砂糖プランテーションに送られた。

ヌーヴェル・フランスがイギリスに征服された際、モントリオール降伏文書文書第XLVII条には「男女のニグロとパニは、奴隷としての性質を保ったまま、所属するフランス人とカナダ人の所有物とする」と明記された。国家間の条約の中でも奴隷制の問題がいか

10）“Population: Slavery”. Canadian Museum of History. *Archived from the original on 2019-03-24*. Retrieved 2019-06-15. “200 years a slave: the dark history of captivity in Canada”. The Globe and Mail. Archived from the original on 2019-06-15. Retrieved 2019-06-15. Signa A. Daum Shanks (2013). “A Story of Marguerite: A Tale about Panis, Case Comment, and Social History”. *Native Studies Review*. Vol. 22, no. 1 英領南部の典型的奴隷制植民地であったカロライナの事例では、「先住民奴隷の数は最大時で1,400人」というのが通説になっているが、筆者が植民期カロライナの総督の史料を調べると「１度の遠征で女子供4000人を奴隷にした」などという記録もある。先住民奴隷の実数は、北米全域において今まで研究者が述べてきた人数をはるかに上回ると考えるのが自然である。

に重要なものだったか、それをこの条項は物語っているのである[11)]。

３．カナダ北西部毛皮フロンティアと先住民奴隷

（１）毛皮会社の実像

1763年にフレンチ・アンド・インディアン戦争が終結してヌーヴェル・フランスがスペインとイギリスに移譲されてまもなく、カナダ西部の開拓はハドソン湾会社（以下、HBC と略記）と1779年創立の北西会社（以下、NWC と略記）を主役として進展する。その二つの会社の歴史については旧著『毛皮と皮革の文明史』と『奇跡の地図を作った男：カナダの測量探検家デイヴィッド・トンプソン』で詳しく紹介してあるが、以下の項目では特にこの二つの会社と先住民奴隷の関連に焦点を当てて考察していきたい。

元奴隷保有者としていま現在大きな議論を呼んでいるマギル大学創設者のジェームズ・マギル（1744年～1813年）は、カナダ草創期の、グラスゴー出身の偉大な実業家・慈善家としてだけ伝えられてきた。マギルが王立学問振興協会に遺贈した１万ポンドはマギル大学創立の資金源となっただけでなく、後にはブリティッシュ・コロンビア大学、ヴィクトリア大学、ドーソン大学など他のいくつかのカレッジや大学の設立にも活用された。

マギルは当時のモントリオールで最も裕福な毛皮商人・土地投機商人・木材商で、そして実は奴隷商人であった。フレンチ・アンド・インディアン戦争でヌーヴェル・フランスが壊滅した動乱期、1763年にはパリ条約で離合したモントリオールのフランス系商人と王党派（主に Highland Scots）が結集して、勅許会社の英国 HBC に対抗できる新会社の設立に動き始めた。1773年、親友のアイザック・トッドと共に、スペリオール湖西方のグランド・ポーテージを越える交易事業に参加し、76年にトッド＆マギル商会を立ち上げ、それが79年の NWC の創設に重要な役割を果たした。トッド＆マギルは、ロンドンの有力委託商人ジョン・ストレッテルと提携する主要会社として一挙に繁栄していった。

アメリカ独立革命の動乱が重なると、マギルはベンジャミン、ジョゼフのフロビシャー兄弟、サイモン・マクタヴィッシュ、パトリック・スモールら16名の出資者とともに正式に NWC を設立し、87年にはロデリック・マッケンジーとその従兄弟のアレクサンダー・マッケンジーを迎え入れ、五大湖北方からマニトバ湖、アサバスカ地方、そしてロッキー山脈か

11）以上については、さらに次の諸論稿・著作・サイトも参照されたい。拙稿「植民期アメリカの毛皮交易：インディアン奴隷制の展開にふれて」（龍谷大学『社会科学研究年報』第20号、1990年）58-80頁。グレッグ・オブライエン『アメリカ・インディアンの歴史』（阿部珠理訳、東洋書林、2010年）。Bonita, Lawrence. “Enslavement of Indigenous People in Canada”. *The Canadian Encyclopedia. Historica Canada*. Retrieved 23 October 2018.

ら太平洋に至るカナダ北西部の毛皮フロンティアの先取争奪戦をHBCとの間にくり広げていく。まもなくアレクサンダー・ヘンリーやジョン・フレイザー、マクタヴィッシュの義兄のシャルル・シャボワイエ、甥のウィリアム・マクギリヴレイとダンカン・マクギリヴレイ、アメリカ人のピーター・ポンドなどもNWCの「一味」となった。

ここで「一味」と書くのは、「会社」とは言ってもHBCもNWCも、その実態はすこぶる「やくざな組織」という一面が実態だったからである[12)]。

まず、マギルと同様、シャボワイエも元は奴隷商人、その他多くの者が奴隷売買に手を染めたり、先住民女性を売り買いすることも当たり前だった。マクタヴィッシュは極端に攻撃的・戦闘的な男だった。上に名を挙げたパトリック・スモールの場合、NWCのウィンター・パートナーとなってクリー族が住む奥地の森に入り込んで20年間住みついた野心家だったが、他の大方の白人移民と同様、毛皮取引でしこたま稼いだ後は「用済み」のクリー族の妻と幼い子供たちを捨て去って、さっさとイギリスに帰還した。その、捨てられた子供の一人シャーロット・スモールと結婚し、波乱に満ち満ちた生涯を共に過ごしたのが前著『奇跡の地図を作った男』で詳しく紹介したデイヴィッド・トンプソンである。HBCの文書や毛皮猟師の日記に「wife」と書かれている場合も、それはいわゆる「country wife」で、当時はそうした「一時妻」を捨て去ったり奴隷として売り払う事例は当たり前であった[13)]。HBCとNWCの両社に雇われて、片目・片足が不自由ながらもマイナス40℃を超える極寒のカナダを妻子同伴で周回し完璧な地図を作りつづけたトンプソンは当時としては全く異色・異例の人物で、メティスのシャーロットとの結婚期間は、記録が残る限りでは当時の結婚最長記録、生涯にわたってシャーロットを愛し続けた。先住民との関係も友好が第一、「赤人（先住民）など居なくなって白人に土地を明け渡すべきだと」誰もが当たり前のように人種差別をしていた時代に、探査・測量したあらゆる領域で先住民との良好な関係を維持しつづけ、現在カナダ国宝となっている「北西領域地図」（北米大陸の５分の１、日本の国土の13倍の領域をもれなく網羅）と膨大な博物学的記録類を残した。HBCとNWCがロッキー山系一帯から太平洋に達する毛皮フロンティアを支配領域にできたのは、何よりもトンプソンの功績に負うところが大きかった。両社合併後、トンプソンが数々の苦難を乗り越え

12）Niigaan Sinclair, Slave trade helped build Manitoba's early economy のサイトおよび下山研究室「北西会社の周辺：D・トンプソンとカナダ毛皮フロンティアの優しからざる絆」2017年度市場史研究会春季大会での報告。http://www.daishodai.ac.jp/~shimosan/nwc.pdf

13）こうした「やくざな一味」のうち、モントリオールで最も富裕な有力商人たちは1785年にビーヴァー・クラブというdining clubを結成し、連日午後の４時から明け方までどんちゃん騒ぎを繰り返して、会食場近隣の世人から顰蹙を買っていた。拙著『奇跡の地図を作った男』（大修館書店、2021年）86頁以下およびJohn J.Bigsby, *The Shoe and Canoe : or, Pictures of Travel in the Canadas, …with numerouJohn J.s plates and map.*

て書き上げた地図や記録類は、すべて「HBC 中興の祖」として名を残すジョージ・シンプソンに奪い取られ、ロンドンの王室付きの地図業者アロースミスに剽窃されてしまう。

それはともかく、毛皮の獲得が滞って会社が不振に陥ったり、逆に新しいナワバリに豊富な毛皮資源が見つかったりすると、NWC の会社内ではすぐに内紛が起こり、乗っ取りの画策や毛皮の横取り、社員同士の銃撃戦まであった。それどころか、NWC と HBC は「セブン・オークスの闘い」としてカナダ史上つとに有名な戦争（1816年）まで起こしている。会社同士が戦争、なのである。また、やはり上に名を挙げたピーター・ポンドは少なくとも２度の殺人を重ねており、「血まみれポンド Bloody Pond」があだ名だった。

HBC も NWC も先住民との毛皮取引にアルコールを乱用し、水で薄めて売るなど詐欺的交易が当たり前だった。そして商売での提携や布教で「文明化」を強要するのが当然という傲慢がどこでも当たり前だった。銃器を売りつけ、至る所で騒乱を呼び起こし増長もした。その動きが、元々多数の奴隷保有も見られた北米西部・北西部の毛皮フロンティアに競争的に入り込んでいった。そこで一層多数の奴隷が生まれたのは、ごく自然な成り行きだった。

クアペル川とアッシニボイン川周辺に赴任していた NWC の事務員ジョン・マクドネルは、同僚による先住民売買が頻繁にあったことを日記の中にいくつも記録している。

1794年３月４日：ある３人の男たちがやってきて馬２頭と商品20ポンドで奴隷の女性を買った。

３月４日：ヒュー・マクラッケンの青い馬をプチ・プルエから20プルエで買った。彼はマンダン族の女奴隷の未払金と引き換えにトランキル老人から彼女を手に入れた。

1795年４月29日：ドゥ・クールが若い奴隷少女を売りに来たが、私が断るとポイトラスが購入した。コルトマンは1818年の報告書の中で、ラプランテが不在の間に４頭の馬と１台の荷車が奪われ、会計の際にはプレゼントとして期待されていた女奴隷が請求された。

という具合である。

1801年11月には HBC のピーター・フィドラーもチペワイアン砦の日誌に次のように書いている。

第６金曜日、スネーク・インディアンの両親が所有する６歳くらいの奴隷少女を、カントリー・スタンダードで７メイド・ビーヴァーで取引した。

第７土曜日、彼らは昨日取引した奴隷少女を再び取りに来て、彼女を引き渡した」

1802年２月18日にはフィドラーは「フォール・インディアンからスネークの若い女性を取引した」と記している。そして20日には「フォール・インディアンが奴隷の女を引き取った」と書いている。11月５日には「５、６歳くらいの童女を、ブラウクの最初の酋長であるNa too pe に渡した」という。翌年２月17日には19歳くらいの若い女性を奴隷にして、スネーク族に渡し、交易品のリストを細ごまと列挙している[14)]。

（２）カナダ北西部先住民社会の奴隷制

北米奴隷制度の歴史の概説書や各種歴史事典、そして民俗学関係の著作・事典・論稿では、北米北西部先住民社会にはヨーロッパ人の渡来以前から奴隷制が存在していたという記述が案外数多く見られる。しかし、その先住民社会の奴隷制が一体どれほどの比重や重要性をもっていたかといったことについては、ほとんど何も解明されてこなかった。

概観を述べるだけであった今までの歴史家や人類学者とは異なり、リーランド・ドナルドは1977年に *Aboriginal Slavery on the Northwest Coast of North America* を著してアラスカからコロンビア川までの海岸文化の「中心的な特徴」として奴隷制が極めて重要であるという指摘を本格的に主張した。アフリカの奴隷貿易史研究家であったドナルドは、奴隷制の役割を重視する自分の主張がおそらくは黒人奴隷史の研究と同様に多くの反論を呼び、多くの専門家たちは先住民奴隷制度の重要性を軽視し続けるだろうと予想していた。案の定、ごく少数の学者はドナルドの主張に賛同する意見を述べたが、多くの著名な民族学者は、「北西部先住民社会の奴隷制度はそれほど重要ではないという正統派の見解」を主張した。

ドナルドの研究は、民族誌や古文書・歴史書などの膨大な資料・史料をもとに「北西海岸文化を概観」し、「19世紀前半の奴隷制の記述」「北西海岸の奴隷制の歴史的背景」「北西海岸の奴隷制の展望」という４つの枠組みから考察を展開して、「北西部先住民社会における奴隷制度の偏在性と中心的な影響」を結論として導き出したのである[15)]。

14）Anne Lindsay, “especially in this free Country:” Webs of Empire, Slavery and the Fur Trade” では、ここで引用したような日記・日誌の内容が多数紹介されている。

15）先住民の間には発達した奴隷貿易ネットワークがあり、ドナルドは「コロンビア川奴隷貿易ネットワーク」と呼ぶ南部地域の奴隷の往来を図示し、ヌートカ海峡のヌウチャヌルスからオレゴン州のシャスタとクラマスまでの沿岸部の実情を明らかにしている（139頁）。北部の奴隷貿易ネットワークもまた、プリンス・ウィリアム湾のチュガック族からバンクーバー島、そして内陸部のアサパスカン族にまで及んでいたという。もっとも、ドナルドの著作を評したＣ・Ｉ・Archer は、より定量的な実証や言語学的・考古学的な実証には一層の慎重さが必要であり、またドナルドが、19世紀に流行した自称探検家たちの根拠の薄い「目撃情報」（カニバリズムや先住民の残虐性を誇張したもの）に多くを依拠し過ぎている点も、改めて検証が必要だとコメントしている。
https://ojs.library.ubc.ca/index.php/bcstudies/article/download/1792/1838/0

戦争捕虜の奴隷化が多かったが、集落間の交易ネットワークの中で贈り物とされたり、貧困・借金のために自らを奴隷にする者もあった。酋長が孤児や自分のバンドのメンバーを奴隷にすることもあった。奴隷は保有者の富と名誉を増すものとされていた。奴隷は、葬儀、鯨狩り、家の新築、生け贄など、いかなる理由でも所有者に殺される可能性があった。また、奴隷は人肉を食するパフォーマンスの材料になっていた可能性もある。

（３）毛皮会社との接触と先住民奴隷

ドナルドの研究の評価はともかく、ヨーロッパ人渡来以前からかなりの数の先住民奴隷が存在したことについては多くの学者の間で異論はない。そこにHBC、NWCという「やくざな」営利企業が関わると、先住民奴隷化の問題はどのように変化や変質を見せたかを検討するのがここでの課題である。大きな見取り図から展望すると、コンキスタドーレスの跋扈や東インド会社設立の当初から、ヨーロッパ人の世界への商業的進出は、砂糖やタバコなどの世界商品獲得を目指す奴隷制植民地形成を主軸としてカルト的布福音主義を伴う「布教植民地主義・クリスチャン植民地主義」として展開していた。それは世界各地で先進的な銃器と「コルテス・ピサロ方式」によって徐々に着実に支配領域を広げていくシステマティックな対外侵攻策の連鎖だった。日本が鎖国という奇策を300年近く墨守したのはこのカルト的植民地主義の脅威に対抗するためだった。以下は、その鎖国時代、日本のすぐ東隣の地域で絶え間なく先住民たちが被った受難の実例である[16)]。

毛皮会社と先住民との接触は、商品の交換ネットワークの波状的な拡散を伴った。イギリスの貿易品には、狩りや釣りに便利な道具、衣類、装飾品などが含まれていた。1821年に書かれた記録には「太平洋岸のすべての原住民に交換で渡される主な貿易品は、マスケット銃、毛布、火薬、弾丸、赤い塗料（顔の装飾用に人気が高かった）、タバコ、ビーズ、ボタン、ブレスレットや指輪などを作る太い真鍮線である。その見返りとして、毛皮商人たちはラッコの毛皮、サケ、銅、先住民のタバコ、ヘラジカの皮、ジャガイモそして奴隷を手に入れた」と書かれている。

オックスフォードシャーのウィットニーで作られた高品質なブランケットが相当な人気商品で、通常、ビーヴァーやラッコの皮、捕虜の身代金、土地の購入、そして奴隷など、大型または高価な品物とのみ交換された。毛皮が手元にない場合、先住民はジャガイモなどの食

16）鎖国政策採用の直接原因については「大西洋奴隷貿易時代の日本人奴隷」http://www.daishodai.ac.jp/%7Eshimosan/sos/japan.html。侵出した地域のトップ層をまず支配して土地や資源を略取する「コルテス・ピサロ方式」がいま現在も石油会社などの活動として世界的に展開している事実については拙著『世界商品と子供の奴隷：多国籍企業と児童強制労働』（ミネルヴァ書房、2009年）。

料品か労働力を提供してブランケットを得ようとした。連日過酷な生活が伴ったこの酷寒の未踏の地域では、タバコは当時、麻薬のように捉えられてすこぶる需要が高かった。乱獲での毛皮資源の枯渇に伴い、ヨーロッパ商人と先住民の取引は毛皮から食糧の取引へ、そして各種輸出向け商品の交換へ、さらに現場の労働力へ、そして最終的には土地略奪へと比重を移していった。HBC が砦を開設したり、先住民のコミュニティや交易所で定期的に取引を行うたびに、仲買人や「ホームガード」と呼ばれる交易担当者が現れた。ホームガードは、会社の従業員に食料、警備、労働力を提供した。彼らは、赴任地の取引へのアクセスを制限したり取引を管理することで利益を得て交易地域を拡大させた[17)]。

HBC と NWC そして J.J. アスターの毛皮会社などの競争により、より多くの先住民労働者がこれらの毛皮会社で働くようになった。19世紀初頭、これらの会社が輸送と供給システムをロッキー山脈とその向こう側へ拡張するにつれ、パートタイムまたは季節的な先住民の労働力はますます重要になった。無論、そうした先住民のすべてが奴隷であったわけではないが、すこぶる安い賃金で雇われるのが通例だった。特に女性への支払いは少なく、実質は無給の使用人という例が多かった。当時の記録にスペイン人が「インディアンを大きな服従のもとに置き、２人と２人を鎖でつないで非常に厳しく働かせている」と書かれたものがある[18)]。

ロシア・アメリカ会社の進出した砦では、ロシア人が雑役とラッコ狩りのために何百人もの先住民を雇っていたというが、ロシア人進出地の先住民には、厳しい毛皮貢納ヤサクが課されるのが通常だった。ヤサクが廃止されるのはロシア革命期になってからである[19)]。

1829年、トマス・シンプソンは、アメリカの船乗りがフラッタリー岬と近隣の海峡で奴隷を買い、ハイダ族のテリトリーに連れて行き、「一人当たり30から50枚のビーヴァーの皮で売れた」と書いている。シンプソンは、奴隷が「この海岸の主要な流通媒体」とまで考えていた。

奴隷が結婚によって砦の領域に入ることもあったため、砦の奴隷制を根絶することは困難だった。毛皮商人の妻が奴隷の従者を連れてくることもあり、HBC の従業員も使用人、家

17）J.R.Gibson, *Otter Skins, Boston Ships, and China Goods: The Maritime Fur Trade of the Northwest Coast, 1785-1841*. McGill-Queen's University Press, 1992, 4-11, 231-238. E.E.Rich, *Hudson's Bay Company*, McClelland and Stewart 1960, Vol.1, 494-495. R.Fisher, *Contact and Conflict: Indian-European Relations in British Columbia, 1774-1890*. UBC Press, 1977, pp.29-30.

18）C.Sauer, *The Ealry Spanish Main*. University of California Press, 1977. 他にも、「スペイン領ではインディオ奴隷を100人単位で数珠繋ぎ」と書いた文献もある。

19）J.R.Gibson, "The Russian Fur Trade." In *Old Trails and New Directions*. Eds. C.M.Judd & A.J.Ray, University of Toronto Press 1980, pp.217-230.　ヤサクについては前掲『毛皮と皮革の文明史』。

事労働者、妻として奴隷を購入した。当初、先住民の労働力は奴隷労働だけという砦もあった。

1839年には「数人の従順な原住民インディアン（奴隷と呼ぶ）を牧夫、荷車、草取りとして雇った」という記録がある。賃金が支払われたとしても、現在の換算で年額４～８ユーロ、経験豊富なイギリス人羊飼いの年額35ユーロと比較すると、格差は歴然である。トマス・シンプソンの回想録には「先住民は扱いやすく、効率的で、何より安い使用人」「ハイダ族の住む海岸地域では奴隷が第一の流通媒体」という表現が見られる。1840年前後にHBCはコロンビア川とフレーザー川の下流で多数の先住民を雇い始めたが、それまでは先住民の中には、与えられる労働を奴隷の仕事と考えて同社のために働くことを嫌がる者も多かった。1833年にはW・F・トルミーという人物が、コロンビア川下流域とピュージェット湾のインディアンが会社のために働くことを頑なに拒否しているのを気に留めて、次のように回想している[20)]。

「白人が来て間もないころは……コロンビア下流域のチヌーク族や、そこからピュージェット湾に向かう先住民たちは、新来の白人たちのために働こうとはしなかった。彼らは、まるでこれでは奴隷と同じレベルだと非難していたのである。」

以上に述べてきたことからも推察される通り、あからさまに奴隷として働かされる先住民も少なくはなかった。北西部毛皮フロンティアには、間違いなく奴隷であった者が多数居たのである。

もともとヨーロッパ人との接触当時、ロシア毛皮商人が進出したアリューシャン列島からスペイン人支配地のカリフォルニア北西部にかけて奴隷労働の利用はごく自然なこととして広まっており、その数は全人口の20分の１から３分の１と推定されていた。アメリカ商人が躍起になって奴隷を集めていたことに、ジョージ・シンプソンは眉を顰めていたが、シンプソン自身が奴隷保有者だった。1821年、ピーター・コーニーもアメリカ人の多くが奴隷商人だったことを観察し、「残念なことに、この海岸ではアメリカ人によって非常に広範囲にわたって奴隷貿易が行われている。彼らは南方で奴隷を買い、北方に連れて行き、ラッコやその他の毛皮と交換する。奴隷を安く買えない場合は、力ずくで連れ去ることも辞さない。マーキュリー号のエアーズ船長は、この方法でコロンビア川から12人の先住民をさらったが、海岸を下っている間に７人が捕鯨船を襲って船から逃げ出し、川に到着したのは１人だ

20）W.F.Tolmie, “The Utilization of the Indians.” *The Resources of British Columbia* 1, 12（1 February 1884）p. 7.

けだった」と書き残した。

24年にはバンクーバー砦からのフレーザー川探検隊にイロコワ族の奴隷が同行していた。翌25年には、多くの記録を残したジョン・スカウラーが「チヌーク族がジャガイモの栽培を拒否したのは、それが奴隷の仕事だったからだ」と書いている。コロンビア川周辺の先住民の多くも、「地面を耕すのは奴隷の仕事だ」と言って、畑を耕すことを拒み、提供された種を育てることも拒んでいた。アレクサンダー・ロスは「奴隷はすべての労働をこなし、チヌークの女は常に２、３、またはそれ以上の奴隷に付き添われており、彼らはどんなときも彼女の意思に従順である」と書いている。奴隷は食料生産者であったが、輸送や交換の単位、狩猟においても重要であった。

チヌーク、ハイダ、タールタンの民族誌には、「狩りをするのは奴隷」という記述がある。29年にはローマ・カトリックの宣教師が50人ほどのカナカ労働者を、主にチヌークやカウリッツの女性である先住民の配偶者と集団結婚させた。

1834年には上述のトルミーは「14歳くらいの１人の少年奴隷と少量の火薬、ボール、塗料、タバコなどに15枚のエルクの皮が与えられた」と述べている。彼はマクローリン（マクラフリン）砦で書き溜めた日記の中で、「マンソン氏が２週間ほど前に、男の奴隷を購入した」と書き、「ブランケット３と２分の１ポンド、４分の１ガロンの火薬、ボール50個、タバコ20葉、中古のポット、混合ラム酒３ガロン、古びた鉄砲１挺が支払われた」と記録した[21)]。

同じ年、後にオレゴン州議会議員となるサイモン・プロモンドンは、ニスカリーで奴隷を所有していた。北米北西部の先住民奴隷化に関連した記録を調べていくと、ジョン・ダンの場合のように、「シンプソン砦周辺では奴隷が主要な労働を担っていた」と述べた記録にも気づくことになる。これは36年の資料である。ダンは、「ベラベラ族が沿岸の奴隷貿易の仲介役であった」とも書き残している。これらの奴隷は物々交換され、海岸地方の南部よりも北部の方が高い値段で売ることができた。奴隷は白人の商人に転売されて、毛布などの実用品や嗜好品と交換されることもあった。38年にシンプソン砦に居たＰ・Ｓ・オグデンは、「イギリスで発布された帝国奴隷解放法がこの辺境にまで影響を及ぼさなかったのは残念だ」と嘆いていた。毛皮会社にはそのための制度的・法的手段はなかった。北部の部族がベラベラ

21）Peter Corney, *Voyages in the Northern Pacific. Narrative of Several Trading Voyages from 1813 to 1818, Between the Northwest Coast of America, the Hawaiian Islands and China* … Honolulu: Thos, G. Thrum 1891; first published London 1821. John Scouler, 'Account of a Voyage to Madeira, Brazil, Juan Fernandez, and the Gallipagos Islands, Performed in 1824 and 1825 *Edinburgh Journal of Science*. 5 (April-October 1826): Alexander Ross, *Adventures of the First Settlers on the Oregon or Columbia River: Being a Narrative of … to Establish the Pacific Fur Company* …: Smith, Elder and Co. 1849.

にやってきて、「本来の誘拐犯」である南部の部族が獲得した奴隷を買い取っていた。狩りの上手な成長した運動能力の高い奴隷は、毛布９枚、銃１丁、大量の火薬と弾丸、エルクの皮２枚、タバコ、その他小物などと交換された。

ジェス・ダグラスは1840年７月に、タク族の間では奴隷が「最も高く評価されている」財産であることに驚いていた。中には20人も所有している者もいた。ダンの記録によると、タクの砦で取引していたチルカット族の間では、１人の奴隷が９人の奴隷と交換されることがあった。奴隷は毛皮と交換され、カイガニに運ばれてアメリカ人やロシア人に売られた。毛皮を手に入れる最も簡単な方法は奴隷貿易に参入することでもあったが、ダグラスはそれは憎むべき貿易であり、それが引き起こす悪は、深い後悔の対象になると感じていた。しかし、「私たちの力では解決する方法を知らないし、私たち自身の利益のためだけなら利用したい」と書いている。

ダグラスはまた、スティキーンではあらゆる階層に「忌まわしい奴隷の売買」が蔓延していることを書き留めている。多くの場合、奴隷は「単に見せ物のために飼われていた」が、「漁師や猟師としても非常に有用」だったという。ロシア領でありながらアメリカの船乗りが頻繁に訪れるカイガニーは、北西海岸の奴隷売買の中心地であった[22)]。

1841年の記録を見ると、ニスカリーの先住民の間で横行する奴隷制の頻度とその恐ろしさをトマス・シンプソンが非難している。同じ頃、ラングレー砦でも奴隷制が蔓延していた。会社関係者は奴隷を購入し、「飼っていた」のだという。

あまりにも奴隷制が当たり前にはびこる情勢を知って、さすがに1842年にはボルドック神父がフランス系カナダ人数名が多数の奴隷を買っていたことを非難し、先住民社会におけるその普遍性も非難している。「誰がここに奴隷制が存在すると考えただろう。しかも、彼らは奴隷をあたかも下等な動物のように売買しているのである。」

ポルドックと同じ砦に居たある人物は、「料理上手な奴隷は毛布10枚と交換されていたが……カウリッツでは一般的に女性は奴隷として扱われ、苦役を割り当てられ、その一方で夫は喫煙や散歩で忙しくしている」と皮肉を書き残した。

上に見てきた通り、1840年代以前、北西部の HBC の施設には奴隷労働が数多く存在し、時には一般的であった。33年に英本国で奴隷制禁止の法律が成立すると、例えば「オレゴンの父」「オレゴンの聖者」と呼ばれた博愛主義者で HBC コロンビア地区の首席代理人だったジョン・マクローリンは、ジョージ砦で11人の奴隷を保有していた船長を解雇した。

22）Dunn, John. *History of the Oregon territory and British North-American fur trade;* London: Edwards and Hughes 1844, pp.273-288. James Douglas, *Diary of a Trip to the Northwest Coast*, April 22-October 2, 1840, pp.36-55.

HBCとしては、会社として奴隷保有禁止を広大なカナダ全域の交易所・砦に行き渡らせることは困難だったため、「奴隷として使うために奴隷を買うことは容認されないが、使用人や妻として解放するために奴隷を買うことは許される」という、少々曖昧な姿勢をつづけていたのであるから、船長としては「使用人だ」といって言い逃れもできたはずであるが、マクローリンはカンザスやオレゴンが奴隷州となり、北米北西部一帯にまで合法的に奴隷制が広がるおぞましさを危惧していた。船長の解雇はある意味、当時としては命懸けの判断だった。なお、33年の奴隷制禁止法で、「むしろカナダ国内では家内奴隷制と黒人女性の〈飼育〉が盛んになった」とC・A・ネルソンは述べている[23)]。

しかし、マクローリンの博愛は例外に止まった。1830年代後半にバンクーバー砦を訪れた英国国教会牧師ハーバート・ビーヴァーとアメリカ政府の代理人ウィリアム・スラカムは、砦の実情を知って大いに驚き、「砦の域内経済と会社の太平洋上での商業活動の多くの側面は奴隷労働によって支えられている」と告発した。36年11月にHBC委員会のメンバーに宛てて書かれたビーヴァーの書簡には、「私はここにいる短い間に、西インド諸島にいた8年半よりも多くの本物の奴隷制度を見た」とある。また、「正確な数は言えないが、40人くらいは居ただろう。彼らは、エスタブリッシュメントのあらゆる階層の人々によって購入され、実際に奴隷として拘束されていた」という。ビーヴァーは後にロンドンの先住民保護協会に対して次のように証言もしている。「バンクーバーのHBC従業員と引退した従業員が、合計で90人もの奴隷を雇っていた。……施設の責任者の命令で鞭打たれた者もいれば、所有者によって残酷に酷使された者もいた。砦の男たちが先住民の女性と結婚するとき、彼らは〈女性の助け〉として奴隷を連れてきた。……男が（先住民の女性を）連れてくるとすぐに、たとえ彼女自身がそれまで奴隷だったとしても、彼女を待つために1人か2人をさらに買わなければならなくなるのだ。」

ビーヴァーの告発に対してはジェームズ・ダグラスが「知事も委員会もコロンビア川と太平洋岸の砦に奴隷制度が蔓延していることを良くは知らず、ビーヴァー牧師の暴露は英国での風評被害を呼ぶかもしれない」と危惧した。速やかに奴隷問題解決に動けなかったのは、「文化的な問題が奴隷の売買を抑制しようとする試みをしにくくしている」という認識があったためである。38年10月の書簡の中で、ダグラスは、「コロンビア川周辺の先住民の感情に鑑みると、残念ながら、強制的な奴隷解放という非常に好ましくない計画に頼らなけれ

23）ちなみに、マクローリンは文政2年（1832年）にアメリカ北西岸に漂流して先住民の奴隷とされていた宝順丸の乗組員（音吉・岩吉・久吉）を解放し、ラナルド・マクドナルドや森山栄之助らの生涯と関わりながらその後の非常にドラマチックな日米関係開始期の展開に微妙に関わりを持つことになる人物である。前掲『毛皮と皮革の文明史』416頁以下。

ば、奴隷制を直ちに消滅させることはできないでしょう。もっと積極的な対策があれば防げるかもしれないですが、大きな騒動や激昂、絶望的な反感に我々の利益をさらすことは正当化されないと私は思っています。しかし私は、奴隷制度が法に反する状態であることを非難しますし、イギリス国民によって奴隷として拘束されているすべての不幸な人々に、自然権を享受するための最大限の保護を提供したいと思っています」とも書いている。さらにダグラスはクーバー砦などに実際に奴隷がいたことを認め、「私のあらゆる努力は、この入植地の範囲内であっても、現実的な悪を根絶することに事実上失敗したのではないかと危惧しています。奴隷にされている人の中には、幼い子供もいれば、あらゆる有用な技術を知らずに育っている人も居るのです」と、奴隷解放問題の難しさに当惑していた事情を吐露している。

一方、スラカムはアメリカ政府に提出した報告書の中で、コロンビア川における HBC の事業のほとんどの局面で奴隷制が浸透しており、その起源は先住民女性と同社従業員の間に存在する広範な社会的関係にあると告発している。「先住民奴隷の値段は８枚ないし15枚の毛布。女性は男性より高く評価される。購入後半年以内に死亡した場合は、購入金額の２分の１が返還される。HBC が使用人に奴隷を持たせることを許可している限り、奴隷制度は永続するだろう。８～15枚の毛布という値段は先住民にとってあまりにも魅力的で、自分の子供を売った例もたくさんある。バンクーバーの仲買管理人は、奴隷は労働者が一緒に暮らす女性の所有物であり、雇われている男性のものではないと言うが、私はこれに反する事例を知っている。」

スラカムの報告はまた次のようにも述べている[24)]。

「奴隷の所有者と言われる女性たちは、まだ子供であるときに、一緒に暮らす男性に自ら買われることが多い。HBC は、使用人に先住民の女性との結婚や同居を奨励することに関心を持っている。そうすれば、男性が土地に根付き、混血の子孫は、会社のさまざまな基地で有用なハンターや働き手になるからだ。奴隷は通常、HBC に雇用される男性の家族のために、薪割り、狩猟、漁労に従事し、どんな余分な仕事にも対応できるようにされる。彼らは狩りを手伝い、馬や野営の世話をし、それによって会社が必要とする少なくとも２倍の人数を雇う費用を節約している。」

実際のところ、大方の住民は非常に貧しく、助けてくれるような友人も居ないため、「例

24）William A. Slacum, “Slacum’s Report on Oregon 1836-7.” *Oregon Historical Quarterly* 13, 2（June 1912）175-22.

外なく現在の奴隷主のもとにとどまる道を選んだ」とも伝えられている。そうした状況で強制的に奴隷解放を実現するには、誰かが衣食住を無償で提供しなければならなかった。何の支援手段もなしに奴隷を森に放逐することは不可能だった。

1844年から6年にかけてのオレゴン州の帰属をめぐる交渉で、スラカムの報告書はアメリカの上院議員カレブ・クッシングによって公表され、HBCは西部本部で奴隷を酷使していると非難された。新規に開設されたビクトリア砦も、奴隷制度や奴隷の襲撃が盛んな先住民文化の中に位置していた。ビーヴァーやスラカムのような告発が繰り返されることを恐れたのか、ジェームズ・ダグラスは植民地総督として、バンクーバー島では奴隷保有を禁止するとの声明を公表せざるを得ないことになった。バンクーバー要塞の労働と奴隷制の伝統は、フランス系カナダ人やアメリカ人入植者によりウィラメット入植地にも受け継がれたが、多くの入植者は、解放された奴隷や購入した奴隷と結婚した。チヌーク族の場合、男奴隷の値段は、無地か派手なストライプの白毛布4、5枚、または2ポンドの火薬の値段とほぼ同じで、女奴隷はそれより高価だった。

ウィラメットのアメリカ人入植者による奴隷の所有と利用は、実は当時非常に大々的なものであった。奴隷州を広げようとする動きは、現カナダ領の北西部にまで及んでいた。奴隷たちは家庭のあらゆる雑用、カヌーの製作、魚捕り、畑の耕作や手入れを連日課され、合計すると数千人もの先住民女性が1843年以前にロッキー山脈以西に入り込んだヨーロッパの毛皮商人と何らかの形で関わりを持っていた。1825年にアレクサンダー・ロスが出会ったフランス系カナダ人は、「私はこの国で12人の妻を持った」と自慢げにロスに話した。ミシェル・ラフランボワズの場合は、「コロンビア川とカリフォルニアの間のすべての部族に妻がいる」と自慢していた。毛皮の年市ランデヴーでは、先住民やメティスの女性が売買されるのが当たり前だった[25)]。

おわりに

ヌーヴェル・フランスが西へ西へと拡がり、HBC・NWCの「社領」として現カナダ領の大半が西へと拡がり、上に名前の出てきた砦や地域の歴史が作られてきた。それはビー

25）以上については、R.S.Mackie, *Trading Beyond the Mountains: The British Fur Trade on the Pacific, 1793-1843*. UBC Press 1997 pp.283-310. および E.F.Dennis, “Indian Slavery in Pacific Northwest.” Part 2. *Oregon Historical Quarterly* 31, 2（June 1930）; pp.181-195; Part 3, *OHQ* 31, 3（September 1930）; pp.285-296. R.H.Ruby & J.A.Brown, *Indian Slavery in the Pacific Northwest*, Arthur H Clark, 1993. に多くを負う。ランデヴーについては拙稿「毛皮取引とランデヴー：アメリカ西部における毛皮フロンティアの開拓と年市」（『市場史研究』第7号、1990）30-36.

ヴァーやシカをはじめとした陸獣の毛皮を求め、乱獲を常として展開した毛皮フロンティアの拡がりに他ならなかった。枯渇した陸獣に代わって、中国で需要の高かったラッコ（地上で最も上質な毛皮が採れるケモノである）やアザラシの海獣毛皮猟が狂ったような勢いで北太平洋一円に進展し、それは実は太平洋一帯における物産の調達や北米東部の工業化や南部奴隷制プランテーションの拡大への投資ともつながり、また広東貿易やベンガル交易でのバーター取引を主軸とした地域経済の展開などとも繋がる、グローバル経済進展の基層的システムの一端を形作るものだった[26)]。ラッコといえば鳥羽の水族館の人気者を思い浮かべるばかりではなく、シベリアから怒涛の勢いで押し寄せたコサック軍団と、北米北西部で貪欲に毛皮を追い求めた荒くれたちの息遣いを思い浮かべるべきである。高値で売れる毛皮や土地を求めた貪欲は、至る所で「優しからざる絆」を産んでいった。その怒涛が、幕末期に北米北西部と北太平洋から日本に迫ったのである。

最初に「１」の項目で名を挙げたＣ・Ａ・ネルソンは、CTVNews.ca の電話インタビューで、「私たちは200年の歴史を曖昧にし、改竄し、多くの場合完全に消し去っています。……カナダの風景の中で、幼い子供たちから大学生までのカリキュラムの中で私たちが省略しているのは、カナダにおける奴隷制度の200年の歴史なのです」と述べた。オンタリオ州黒人歴史協会の会長ナターシャ・ヘンリーは、「カナダ人の意識の中には、奴隷の問題は教える必要がないという通念があります。私たちの国の歴史の始まりを教える際に、奴隷制度はその物語の一部ではないとされて来たのです」と述べ、これを「システム的な沈黙」と呼んだ。そのシステム的な沈黙が積み重なって作りあげられてきた歴史像を、ある意味誠実に、そして忠実に辿ってきた傾向を持つのが、わが国のカナダ史研究の歩みだった[27)]。

木村和男「毛皮交易から生まれた『新しい民族』―カナダの混血先住民メイティの誕生―」はシルヴィア・ヴァン・カークの学説（カナダにおける多くの優しい絆説）をそのまま踏襲して「先住民を暴力的に駆逐して大陸の支配者となったのは、北米、中南米を問わずヨーロッパ人の『原罪』であり、カナダも残念ながら例外ではありえないが、カナダ西部では…例外的なほど麗しいインディアン＝白人間の家族関係が成立した」と述べている。「わ

26）拙稿「毛皮：北米交易圏をめぐる二つの歴史層」（桃木至朗責任編集、MINERVA 世界史叢書『ものがつなぐ世界史』ミネルヴァ書房、2021年）第９章。
http://www.daishodai.ac.jp/~shimosan/soushoindex.pdf

27）Systemic silence': Canada's ignored history of slavery. これと併せて、*The Hanging of Angelique: The Untold Story of Canadian Slavery* などの著作があるアフア・クーパーのコメントにも触れている CBC のサイト「Canada's slavery secret: The whitewashing of 200 years of enslavement」なども参照されたい。「沈黙」をしなかった若干の例外として、神保満氏の一連の著作や細川道久『白人支配のカナダ史』（彩流社、2012年）はある。

が愛するカナダ」での「多くの優しい絆」の一種例外的な形成・展開の歴史を最大限に幾度も強調し、自説の４つの柱の一支柱とする木村氏は、カナダ毛皮史についての一連の著作において、「カナダでも多くの優しからざる絆」が基本であったことを強調した拙著『毛皮と皮革の文明史』に対して、全面否定の手厳しい酷評を重ねておられたが、氏は「優しい絆説」の日本への紹介者でありその説を自説の「骨格」と位置付けておられたのであるから、それは当然の主張だったといえる[28)]。

しかし、本稿に挙げた事例を垣間見るだけでも、「優しい絆説」がカナダ人の集団的願望から生まれた共同幻想であったことが納得できるはずである。視点を変えた新たな実証から、そうした幻想はやがては覆されていく。歴史は事実ではなく、幻想の上に築かれてしまうということを、我々は肝に銘じておきたい。

【謝辞】

本稿執筆に際しては、大阪商業大学図書館特別研究図書購入支援制度によって「ハドソン湾会社関連文書類」などを利用することができた。また、2008年に科学研究費助成でカナダ調査を行なった際、資料入手に関して何かとお世話になったトロント大学図書館やカナダ文明史博物館、Library & Archives of Canada、McCord Museum of Canadian History、そしてハドソン湾会社文書館の方々に改めて感謝したい。

28）木村和男『歴史と地理』539 号（山川出版社、2001年）。『カヌーとビーヴァーの帝国：カナダの毛皮交易』山川出版、2002年、『毛皮交易が創る世界：ハドソン湾からユーラシアへ』岩波書店、2004年、『北太平洋の「発見」：毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』山川出版、2007年）。